

二ホンジカによる食害からの再生を目指して

—滑床山（三本杭）でのミヤコザサ植生回復への取組—



昭和61年頃（写真上）と
平成19年（写真下）の滑床山の姿

出が見られるなど、そのまま放置すれば裸地化が一層拡大する恐れがありました。

また、当地周辺は滑床山林木遺伝

資源保存林に設定されているのをはじめ、足摺宇和海国立公園第一種特別地域や水源かん養保安林・保健保

安林に指定されているなど、自然環境の保全上、非常に重要な地域とされています。このため、四万十川森林環境保全ふれあいセンターでは、

植生の衰退・消失の原因等についての早急な調査と、調査結果に基づく植生回復のための具体的方策の検討を通じ、滑床山の裸地化対策に取り組んできました。

検討会においては、①特に被害が著しい山頂付近の二箇所にシカ防護ネットを設置すること、②被害を受ける前の植生であるミヤコザサを移植することが提言されました。

（3）シカ防護ネットの設置とボランティアによるミヤコザサ地下茎の植栽

山（なめとこやま）（通称三本杭（さんぽんぐい））周辺（愛媛・四万十森林管理署管内）は、四国山地の登山の人気スポットで、かつてはミヤコザサやオンツツジが群生していました

当時、原因は二ホンジカによる食害と考えられていましたが、被害の実態等の詳細は明らかにされていませんでした。被害の著しい箇所では、植生が消失、裸地化して、土壤の流

（1）被害地の調査

平成一七年度に現地調査を行った

検討会での提言に基づき、平成一八年二二月にシカ防護ネットを二



移植作業の参加者

ボーリスカウトと地元関係者である「南予のぼろう会」、「滑床を愛する会」、「滑床千年の森をつくる会」、松野町役場、四万十中央森林組合、西土佐村森林組合、森林総合研究所四国支所など様々な団体でした。

(4) 移植後 の状況の把握
ミヤコザサの移植後、ミヤコザサ受けていない箇所から掘り取ったミヤコザサの地下茎を移植しました。移植は、モザイク状に二三七箇所設定した一メートル四方の区画に敷き詰めるようにして行いました。

参加したのは、愛媛県・高知県のボーリスカウトと地元関係者である「南予のぼろう会」、「滑床を愛する会」、「滑床千年の森をつくる会」、松野町役場、四万十中央森林組合、西土佐村森林組合、森林総合研究所

箇所合わせて延べ五〇〇メートル設置して、〇・七三メートルを囲い、ニホンジカの侵入を防ぐ措置をとりました。また、平成一九年三月に、ボランティアなど約一二〇名がシカ防護ネットで囲まれた二箇所に、被害を受けていない箇所から掘り取ったミヤコザサの地下茎を移植しました。移植は、モザイク状に二三七箇所設定した一メートル四方の区画に敷き詰めるようにして行いました。

前者の七箇所では、平成一九年七月にはミヤコザサは平均で一区画当たり四七本でしたが、一年後には、平均で四〇〇本になるなど移植したミヤコザサは順調に増殖していることがわかりました。

また、地下茎を移植していない対照区において、平成二〇年七月には

生き残っていた地下茎から発生したミヤコザサが平均で一区画当たり約一六〇本発生していることが確認されました。

シカ防護ネットの効果により、(注)



成長したササ

この取組を実施している滑床山周辺は、これまでも森林環境教育の

原植生であるミヤコザサは、移植のみならず生き残りの地下茎からの発生も確認され、順調に回復しています。これは、シカ防護ネットを張つてニホンジカの侵入を防ぎ、食害などを防いだ効果が十分に發揮されたことによると考えられます。しかしながら、未だミヤコザサが地表を覆いつくすまでには至っておらず、今後も経過観察が必要です。

4 今後の取組み

フィールドとして活用してきたところであり、多くの皆さんに植生が回復しつつある様子をご覧頂いております。当センターでは、今後も皆さんと一緒に植生回復に取り組み、滑床山が以前のようにみどり豊かな山に戻るよう、ニホンジカ対策などに引き続き取り組んでいく考えです。

(注) ミヤコザサは地下茎によって増殖し、地上部が食害されても地下茎が生き残っていれば、その地下茎から地上部が発生します。

ササ生育状況(本数)一山頂

